

2011.9  
TOHOKU

二〇一一年九月  
南三陸・石巻紀行

水城ゆう



## 目次

被災地へ	3
出発	4
北上、南三陸町へ	6
南三陸町	7
仮設庁舎、復興祭	8
志津川小学校体育館	9
最初の歌と音読ボランティア	11
石巻の夜	13
朝の石巻市内	14
津波の傷跡と支援のありかた	16
仮設住宅での活動	18
皆さんとお別れ	19

## 被災地へ

いろいろないきさつはあったんですが、そこはごっそりはぶくことにします。

金沢と東京に本社がある三谷産業株式会社の執行取締役・松嶋さんから、「支援するから被災地でボランティア活動をやりませんか」という話が来たのは夏の初めのことでした。もちろんふたつ返事で「やります！」と答えました。

その後、支援ボランティア活動のための助成金があるというので、申請してみました。何人行くかによって費用も変わりますが、交通費と宿泊費はかかなりかかります。仮にげろきよ（現代朗読協会）メンバーが1人で行くとなると、往復の交通費だけで15万以上。飲食代は各自がなんとかするにしても、宿泊費もかかりますし、その他の経費もあります。助成金があれば助かると思ったのです。

が、結果的に助成金は認められませんでした。「より緊急性の高いものから」という理由で、私たちの活動にはおりなかつたのです。

これは被災地ツアーは中止かな、とあきらめかけていたところ、なんと三谷産業から「交通費と宿泊費も持ちますよ」という話が来たのです。これにはびびっくり。

じつは三谷産業は東日本大震災直後からすぐに動きはじめていて、これまで何度か現地に物資を運んで支給したり、活発に支援活動を展開してい

るのです。が、被災地の人といっしょになにかやるような交流型のイベントはまだやったことがありませんでした。

現代朗読協会で協力できることがあるというのは、私たちにとつてもうれしいことでした。

私たちににながやれるか考えてみました。

げろきよは発足以来、学校や養護施設、老人ホームなどで公演やワークショップをやってきました。また、震災以後は「音読ケア」という心身ケアワークをやっています。これらの経験からプログラムを用意することにしました。

小中学校でおこなってきた宮澤賢治作品をコラーージュした朗読プログラム「Kei」や、新美南吉の「一年生たちとひよめ」、そして音読ケアのワークをいくつか。

一緒に行ってくれる人を募集したところ、ゼミ生から野々宮卯妙、照井数男、唐ひづる、山田みぞれの4人が、そして私といっしょにOeufst(うふ)というユニットで音楽活動をやっている歌手の伊藤さやかが、計の人で行くことになりました。伊藤さやかが加わったことで、歌もいっしょに歌えるねということになりました。

## 出発

二〇一一年九月二十五日、日曜日。

午前五時に羽根木の家を出発、ということ、三谷産業の松嶋さんと都平さんとひらがレントした十人乗りのワゴン車で来てくれました。

松嶋さんは前日に金沢から東京入りして、都平さんといっしょに早朝から来てくれたのです。

羽根木の家では私と野々宮と唐の三人が乗りこんで、五人で北戸田駅に向かいました。北戸田駅で埼玉組と合流することになっていたので、山田みぞれは埼玉ではなく江戸川区ですが。

夜明けの空が美しく、天気は幸い、よさそうです。

北戸田駅には予定より二十分ほど早く、六時四十分に到着しました。

待ち合わせは午前七時だったので、時間までに山田みぞれ、伊藤さやか、



照井数男の三人がやってきて、メンバー全員が揃いました。三谷産業のおふたりと挨拶を交わして、さっそくワゴン車に全員が乗りこみました。ワゴン車には、各自の荷物のほかには、三谷産業が運ぶ支援物資、唐ひづるが持ってきた差し入れ物資のほか、楽器類。今回は二カ所でイベントをやる予定でしたが、一カ所は確実にピアノがない、ということでキーボードを持っていくことにしたのです。

最初はいつも使っているモニタースピーカーとミキサーを持って行こうかと思いましたが、重いし、かさばるし、それだけで電源も三つも必要なので、機材変更しました。KORGのミニシンセサイザーを音源と外付けmidiコントローラーにして、MacBookAirをもうひとつの音源に。スピーカーは思い切ってBOSSの大音量対応のiPhone用のものをあらたに購入しました。

ミキサーはかさばるので、ヘッドホンをいくつもつないで何人もで聴くためのたこ足分配器を、ミキサーのように使って代用。これだとまったくかさばりません。また、キーボードはどうしても電源が必要ですが、スピーカーはバッテリーを内蔵しているので不要です。

このような最小限ライブ機材を

工夫して、持っていきました。なので、車のなかも余裕があります。不謹慎かもしれませんが、なかばピクニック気分で楽しく出発。いや、それでよかったですと思います。ほからかな気持ちで訪れた私たちを、現地の人たちも結果的にはほがらかに迎え入れてくれましたし、それがとてもよい時間を持てるベースになったとも思います。

北戸田駅前でお互いのケータイ番号を交換したり、朝食にサンドイッチを買ったりして、車に乗りこみました。サンドイッチの具が「底上げ」してあって、「詐欺だ！」と騒いだりしているなか、ツアー車は外環道から高速に乗って、川口から東北自動車道へ。

交通は順調に流れています。そして空はますます明るくなって日がぼつてきました。

寝不足の人もいたらしく、さっそくとうとうとする者、数名。もちろん三谷産業のおふたりは運転席と助手席で頼もしく車を運んでくれていきます。

埼玉県からあつという間に栃木県に入り、10時すぎくらいに最初の休憩ということ、那須高原サービスエリアでストップ。

写真はそこで撮ったスナップですが、一番右側にハゲジーさんがまるでメンバーのひとりのように写りこんでいるのがおかしかったです。

そしてツアー車は栃木県からさらに福島県、宮城県へと向かって北上していきました。



## 北上、南三陸町へ

広がる田園風景は、稲刈りがすすんでいるところとすすんでいないところが半々くらいでしょうか。

私は北陸の米所の生まれですが、北陸は早場米がメインで、この時期には稲刈りはほとんど終わってしまっています。東北は稲刈りの時期が遅いようです。

稲刈りが終わったあとに田んぼのなかに立ててある稲藁の束のことを、唐ひづるは「こなきじじい」と呼んでいるそうです。たしかにそのように見えないことはありません。これも地域によって形がいろいろです。

唐ひづるは青森県の出身で、今回のメンバーのなかではただひとり、東北出身です。そういうわけで、彼女にはイベントでいろいろと活躍してもらいました。

宮城県にはいつてから、早めの昼食を取るようになりました。二時すぎ、サーブエリアに入って、食堂



で昼食。

このメニューに「油麩丼」というものがあつたので、私はそれを注文してみました。唐ひづるによれば、東北には油で揚げた油麩というものがあるのだそうです。それを親子丼のような玉子とじにしたものです。

食べてみると、肉のはいってないすき焼きをご飯にぶっかけたようなもので、まあ悪くはない味です。

一同八人でなごやかに昼食。



ふたたび東北道で北上。

仙台をすぎてすぐに一般道へと降り、今度は南三陸町へと向かいます。ここまでは内陸を通るルートが多かったので、内陸から海へと向かう形です。海べりはほとんど通ってこなかったため、津波の被害にあつた地域はまだ見ていませんでした。

かなりの田舎道で、コンビニ一軒、ありません。食堂のようなものもほとんどなく、サーブエリアで早めの昼食を取つたのはこういう意味だったのか、というのわかりました。

そしていよいよ最初の目的地である南三陸町へと入っていきました。山道を抜けて扇状地へと出ていくと、川にそつた道の両側に津波の被害を受けた地域がいきなり現れました。

瓦礫があちこちに山と積まれていて、住宅があつただろう場所はほとんどさら地になっています。コンクリート枠の土台だけが残っています。

津波が押し寄せてきて、家が根こそぎ流されていく南三陸町の高台から撮った映像を見たことがあります。人々の驚きと悲鳴が耳によみがえってきました。

### 南三陸町

漁港へとつづく扇状地に残っているのは、わずかばかりの鉄筋コンクリートのビルばかりです。

スーパーマーケット、役場、病院、そういった施設だと見えましたがいずれも三階から五階建てくらいのもので、東京のように大きなビルはありません。そしてその上階部分まで津波が押し寄せてきたこ



とが明らかです。

そして平地はすっかり建物がなくなっています。

写真には、三階建てのマンションの屋上に車が押しあげられ、そのままになっています。つまり、ここまで車がぶかぶかと運ばれてきて、取り残されたというわけです。水位がここまであつたということでしょう。

手前には多くの住宅が建っていたはずですが、二階建ての屋根をはるかに超える水位ですべて押し流されてしまっています。

すっかりなにもなくなっている平地ですが、それでもところどころ、人々が集団で組織的に瓦礫の後始末をしている光景がありました。ボランティアの人たちが来て作業をしているようでした。組織だった動きのようでした。

そういえば二三日から二五日にかけては連休でした。連休を利用して各地からボランティアに来られた方は多いようでした。

というのも、このあと私たちは臨時の役場のほうに行つたのですが、その脇の広場では復興フェスティバルがおこなわれていて、地元の人だけではなく各地からやってきた人々で大変にぎわっていました。



南三陸町は役場も津波で使えなくなってしまったので、仮設の役場を高台に開設してありました。

高台というよりも、山間部といったほうがいくらかの場所です。南三陸町は海に山が迫っている地形で、町があつた扇状地からすぐに山にはいつていきます。その山間部のなだらかな場所に、もともと水産加工会社がいくつかと、住宅がいくらかあります。その空き地に臨時の役場を仮設したようです。

三谷産業の松嶋さんがここで担当者と待ち合わせをしているということ、臨時庁舎に行っている間、私たちは車で待機です。

### 仮設庁舎、復興祭

臨時庁舎は災害対策本部にもなっていて、休日にもかかわらず車が頻繁に出入りしています。警察車両も出入りしています。

松嶋さんが戻ってくるのを待つあいだ、私たちは脇の広場でおこなわれている復興市の様子を見に行くことにしました。



広場では仮設のステージが作られ、屋台がたくさん出て、大変にぎわっています。広場のまわりには車がたくさん並んでいて、なかには遠方の県のナンバーもあります。また、宿泊用のテントもいくつか並んでいて、連休を利用して泊まりがけで来ている人もいますのでしよう。

広場に行ってみると、たくさんさんの天幕が並んでいて、地元の産品や食べ物売っています。これは地元の人たちが出しているもので

しょうか。町が壊滅して、町で商売ができなくなっている人にとっては、ここでものを売ったりできるのはありがたいでしょう。お客さんもたくさん来ていて、地元の人がばかりではなさそうです。遠方から来たような人もたくさん見受けられました。

広場の端には仮設ステージができていて、かなりの大音量で音楽が流れています。

ステージの上には女性歌手がひとりいて、カラオケに合わせて歌っています。私は知らない人でしたが、東京から来たプロの歌手のようでした。しかし、バンドはいなくて、ひとりで歌っています。

聴いている人も何人かいましたが、できあいのカラオケに合わせて歌っているのは、いくら生身の歌手がやっているとはいえず、なんとなくお仕着せの商業的なショーみたいで、ちよつと変な感じをおぼえました。







このツアーの前、こういったボランティアの芸能慰問活動について、私はいくらか声を聞いていました。

そのひとつに、東京から無料コンサートとか無料ライブとかいって来るのはありがたいけど、もうそんなに来てもらわなくてもいいんだよね、という意見がありました。たしかに考えてみれば、東京から芸能活動として慰問に行く人はそれが一回きりのチャンスかもしれないですが、受け入れ側してみればそういう人が次々と来れば何度かあるでしょう。

だから、私たちも、行くにあたってどんなことをすればいいのか、なにをすれば喜んでもらえたりお役に立てるのか、かなり悩みました。しかし、結論は出ないまま、いくつかの演目やワークを用意して、来てしまいました。

ただ、これだけは考えていた、ということがあります。ショー的に一方的になにかを演じたり歌ったりして終わり、というようなことだけはやらないでおこう、ということ。とにかく、なんらかの形でコミュニケーションを取りたい、つながりを持ちたい、ということが、私の頭のなかにはありました。

広場の仮設ステージでカラオケに合わせて歌っている女性を見ながら、私はこの思いを強くしていきました。

### 志津川小学校体育館

慰問ボランティアについて、受け入れ側の対応が大変だろうと思われることについては、私たちについても同じことのようにした。

松嶋さんが役場で待ち合わせしているはずの担当者になかなか連絡がつかず、結局別の人に会場の鍵を借りて行くことになったようです。

会場は志津川小学校の体育館。

行ってみると、しーんと静まり返っていて、人っこひとりいません。

小学校は高台にあつて無事だったんですが、そこへ通じる道の途中までは、津波の被害がくつきりと残っていました。「ここまでは被害にあつた」というラインをはつきりと引くことができるのです。隣り合った家なのに、坂の下のほうにある家は被害にあつていて、上のほうの家はまったくの無傷、という状態を見ることができました。

小学校の屋外プールと広々としたグラウンドがあり、その敷地の外側に仮設住宅がならんでいます。が、そこにもほとんど人の気配がありません。





皆さん、復興祭のほうに行ってしまったているんでしょうか。

校門の前に野生の栗の木があって、イガがいくつも落ちています。いくつか実も拾いましたが、ほとんどはだれかが取ってしまったか、鳥や獣に食べられてしまったんでしょう。というほどに、小学校は山に近接しています。裏山はけっこう深い山です。狸や狐が住んでいそうです。

校舎の外に立派なへちまが何株も植わっていて、青々とした巨大へちまがたわわに実っています。

役場の方が体育館の鍵を持ってきてくれたので、ともかく機材を搬入して、準備をすることになりました。

体育館は小学校にしてはびっくりするほど大きくて立派で、真新しい感じでした。あまりに広いので、ステージの前のほうに椅子を集めてならべ、そ

ちらでこじんまりとやることにしました。

ステージの上には、これも立派なグランドピアノがあるので、それを使うことにしました。

私たちが準備をするあいだ、三谷産業の都平さんが人集めに行ってくれました。仮設住宅にピアノを持って行って、声をかけてくれたのです。

翌日もそうでしたが、都平さんも松嶋さんも本当に労力を惜しまずによく動く人で、私たちも助かりましたが、見習いたいものだと思ったものです。

しかし、なかなか人が集まらず、時間になっても数人しか来ないので、急遽、客席をステージの上にあげてしまうことにしました。ピアノのまわりに集まってもらって、そこでさらにこじんまりとやろうということになりました。

準備してきたプログラ  
ムも捨てて、コミュニケー  
ションを取りながら臨機  
応変にやることにしまし  
た。



## 最初の歌と音読ボランティア

まず来てくれたのは、若いお兄さん。ニコニコして、こちらが話しかけるとなんでもきさくに答えてくれました。

聞いてみると、仮設住宅におばあさんとふたり暮らしということで、一日中家にいてテレビばかり見てすごしているとのことでした。仕事はしていないのです。

どんな番組が好きなのかと聞いてみると、お笑い番組が好きで、とくに「笑点」が気に入りとのことです。それなら、朗読も多少は興味を持つてくれるかな、と思いました。

八十七歳だという、びっくりするくらい元気なおばあさんが来てくれました。このおばあさんは本当に話し好きで、そして歌好きで、私たちのイベントはすっかりこのおばあさん中心に進めることになりました。こちらから一方的に用意してきた出し物やワークをやるのではなく、おばあさんの話を聞きながら、歌ったり朗読したり、といった具合に進めていきました。

おばあさんは老人クラブで歌っているという替え歌を何曲か歌ってくれました。お座敷小唄の替え歌で、ボケ防止の歌だという、全部で5番くらいまである歌を、なにも見ずに完璧に歌ってくれたり、演歌の替え歌を歌ってくれたり。私たちのほうが楽しませてもらったほです。

ほかにも他県から応援に駆けつけていた役所の人も来てくれました。私がピアノを弾いて、何曲かいっしょに皆さんと歌いました。選曲をいろいろ考えてきたんですが、世代を越えて共通に歌えるのは、坂本九の「上を向いて歩こう」や「見上げてごらん、夜の星を」などもふさわしかったようです。被災地では多く「ふるさと」が歌われているようですが。

私たちの朗読も聞いてもらいました。朗読プログラム「Kenji」は長いので、短い「一年生たちとひよめ」を聞いてもらいました。

仮設住宅に暮らしている人たちにはコミュニケーションのニーズがあるようで、話したがるし、なにかいっしょにやれることがあるととても喜んでもらえるのです。

話には津波のときの様子が出てきて、まだまだ話し足りないようでした。こちらでも聞くこと、共感することに徹して接することを心がけました。





終わってから、おばあさんはとても楽しかった、ありがたかった、とみんなと何度も手を取りあってくれました。青年も相変わらずニコニコと楽しそうでしたし、役所の人たちもいっしょに歌に参加してくれたりと、私たちもいろいろと学んだり気づいたりすることが多かったです。

こういう活動の場へ皆さんにもっと来てもらうための工夫についても、あとから三谷産業のおふたりといろいろと話し合ったりもしました。

終わったのは午後四時半くらい。日かげりははじめたなかを撤収し、志津川小学校の体育館をあとにしたのでした。

## 石巻の夜

宿泊は三谷産業がとってくれた石巻グランドホテル。

行ってみると、びっくりするくらい立派なホテルでした。より安価なホテルもいくつかあるらしいんですが、長期滞在者でどこもいっぱいで、ここしかとれなかったとのこと。そして全員、シングルをとっていただいてました。

私たちはうれしいですが、なんだか申し訳ないような気分。

荷解きしたあと、夕食のために全員で駅前までぶらぶらと歩いていきました。

石巻は漫画で町おこしをしているらしく、あちこちに漫画のキャラクターが立っています。とくに石ノ森章太郎の生誕地である登米市で、それにちなんで「サイボーグ〇〇九」や「仮面ライダー」が目につきます。

日曜日ということもあってか、駅前の食堂や居酒屋はどこにもぎわわって、活気がありました。

ようやく〈庄屋〉に∞人分の席を見つけて入りました。こうなると、夕食というより、宴会というか懇親会のような雰囲気。



料理は宮城県だけあって、牛タンはもちろん、海の幸が豊富です。そして、ビール、焼酎、日本酒。

堪能させていただきました。

三谷産業の松嶋さんは、執行取締役という重役にもかかわらず大変ささやかな人で、おやじギャグを連発させてげろきよ女性陣をめるめるにしています。都平さんも、学生時代ミュージカルをやっていたり、演劇が好きだということもあって、伊藤さやかとそちら方面の話に花を咲かせたりして、みんなで大盛り上がり。

この店の人がまたおもしろく、なかでも井上時光さんというおじさん店員はノリがすばらしくよく、地酒の「墨酒江」をおごってくれたりしました。

そんなこんなで、すっかり満足したげろきよメンバーは、ホテルにもどり、それぞれの部屋に帰って翌日にそなえ早めに休んだのでした。





## 朝の石巻市内

翌二六日。月曜日。

石巻は雲が少しあるけれど晴れていい天気になりました。ホテルから見た石巻市内の様子をバチリ。

昨夜も歩いてみて気づいたので、一見石巻市内は店も補修されて再開しているところが多く、活気もあつて、かなり復興が進んでいるように思えるのです。しかし、よく見ると、表通りから一步はいったところは、傷んだ家がそのままになってだれも住んでいなかったり、さら地になっていたり、まだまだ津波の傷跡が残っています。表通りの家も、下屋が壊れているのがそのままになっていたりします。  
まだまだ復興なかばなのです。

ホテルで朝食。

従業員のお兄さんに聞いてみたところ、このホテルも四〇センチくらい浸水があったとのこと。表側のほうはかなりやられたということでした。いまはすっかりきれいになっていました。



ホテルのあたりは海岸よりやや高くなっているので、甚大な被害はまぬがれたそうです。

この日は水産高校のグラウンドの敷地を利用して作られた仮設住宅の集会所でイベントをやることになっていました。

まずは市役所に行き、集会所の鍵を借りるということで、車で移動。

市役所は津波の被害を受け、現在は「エスタ」というショッピングモールのなかにはいつています。

市役所の前には仮面ライダーV3の像が立っています。

市役所の前、駅前、駅前商店街、そして漫画ストリートと、このような像やペイントがたくさんあります。とくに「サイボーグ〇〇九」関係の像は豊富で、全員が揃っているようです。我々ならず記念撮影をする人がいました。

石ノ森萬画館も海の近い河口のほうにありますが、これは津波の被害をまぬがれたのでしょうか。見たところ、流されることもなくしっかり建っているようでした。しかし、そのそばを渡る橋は、橋桁がひしゃげて折れ曲がり、まだ補修が終わっていませんでした。



## 津波の傷跡と支援のありかた

市役所から会場である仮設住宅のある地区へと車で移動。

街なかから郊外へと出ると、とたんに津波の傷跡が目立つようになってきます。車のなかから写真を撮りながら移動していったのですが、げろぎよのみんなもなんとなく口数が少なくなってしまうました。

すっきりサラ地になってしまった住宅地のあいだに、まだ片付けられていない家や建物が散在しています。聞けば、瓦礫の置き場所がもう満杯で、あらたな瓦礫置き場が決まるまで片付けようにも片付けられない物件が多くあるということです。

写真にあるように、郊外型の本屋さん、震災から半年以上たつのに手つかずで、壊れたまま営業できています。この先、この本屋さんには営業できるようになるのでしょうか。

住宅の被害はさまざまで、一階部分はかなり壊れているけれど、二階部分はほとんど無傷で、二階に住んでいる



ような家もあれば、二階まで被害が及んでとても住める状態にないものがそのまま残っていたりもします。震災から半年以上たっていることをかかんげると、その被害の大きさと深さを思わざるをえません。

また、家をなおすにも、資金がある人はいいでしょうが、資金に余裕のない人は難しいと思われれます。罹災証明書の発行も遅れていたり、認定基準が難しかったり、さまざまな条件でつらい思いをしている人も多いようです。

支援の手はまだまだ必要なのです。

そして、支援は継続的な物資の支援のほかにも、今度はしだいに精神面の支援も必要になってきています。なかなか生活や環境が改善しないこのような状況が長くつづけば、身体ばかりでなく心も疲弊していくであろうことは容易に想像がつくことです。

では、実際にどんな支援が必要なのでしょう。それについては、十分にしっかりとかんがえていきたいものです。

三谷産業の支援も、当初は食糧や食器などの消費材、生活物資が優先的でした。そしてそれは大変喜ばれました。とくに揃いの食器類は、一家がそろっておなじ食器で食事ができるのがうれしい、といって、ただ



お腹を満たすだけでは足りない食事の楽しみを取りもどすこともできたのではないだろうか。

こういった物資面の支援は引きつづき必要ですが、さらにメンタルケアなどの精神的な支援、娯楽やコミュニケーション面での支援などが、今後はさらに必要になっていくと思います。その点で、現代朗読協会がおこなうような公演（＝娯楽）とワーク（＝コミュニケーションとメンタルケア）を組み合わせた活動はお役に立てるかもしれません。これに物資支援も組み合わせれば、かなり立体的で柔軟な支援活動を実現できそうな気がします。

これについては、今後、三谷産業のみならず、さまざまな団体や個人へも協力をあおいでいきたいものです。





### 仮設住宅での活動

石巻水産高校の第二グラウンドに作られた仮設住宅地へ。

石巻には数百の仮設住宅地がいまだに存在していますが、ここはそのなかでも大きなほうだそうです。写真のような五家族もしくは十家族が入れるユニットが、四十棟くらいな

らんでいるでしょうか。  
書き忘れていましたが、昨夜、南三陸町から石巻のホテルに行く途中で、ここに寄って、この日のイベントのチラシをみんなで手分けしてポストにポストしておいたのです。

集会所は体育館ほど広くはありませんが、柔道の道場くらいの広々とした建物です。

行ったらすでに玄関があいていて、窓もあけはなつて空気が入れ替えられていました。

ここにはピアノがありません。さっそく演奏機材を運びこみ、セッティング。ついでにホワイトボードも見つかったので、それを使うことにしま

した。

席は座布団と椅子の両方を用意しました。

三谷産業の都平さんがふたび仮設住宅を回って、お客さん集めをしてくださいました。三谷産業はすでにここに何度か物資を届けに来ていて、顔を覚えてくれている人も多かったようです。

やってきたのは、やはりご高齢の方が多かったのですが、五歳くらいの男の子とお母さんもいました。ほとんどが女性でしたが、途中から男性も数名参加してくれました。

頃合いを見計らって、まずは簡単に私が挨拶してから、昨日は上演を見送った「Kenji」という朗読プログラムを始めました。

この模様は、近く編集して、YouTubeで公開する予定です。宮澤賢治の作品をコラボジュした、もともと三十分近くある朗読なんですけど、少しだけはしよって見ていただきました。

みなさん、とても熱心に見てくれて、最初は騒いでいた子どもも途中から座って見てくれました。やはり、おなじ東北出身の宮澤賢治の作品ということもあったのかもしれない。

「Kenji」のあとは、呼吸と声出しのワーク。現代朗読協会では「音読ケア」



と呼んでいるワークの一部を、少しアレンジしてやってみました。お年寄りたちはこんなふうにならないうまに慣れているのかもしれない。とてもいいノリで、楽しくやってくれています。そして気持ちよさそうです。こちらもうれいがありました。

声出しでは『吾輩は猫である』の冒頭部分を使って、東北弁のイントネーションで読んでみたり。ここではもちろん、青森出身の唐ひづるが大活躍したことはいうまでもありません。

また、「この道はいつか来た道」という歌の歌詞を、まずみんなで声を合わせて朗読してから、そのあとでいっしょに歌う、というようなこともしました。歌は、歌詞を朗読するのと歌うのではまた違った味わいがあり、両方ともやってみると思いがけず新鮮なんです。そのことを皆さんも楽しんでくれたようでした。

最後は伊藤さやかに歌ってもらって、昨日も歌った「上を向いて歩こう」や「見上げてごらん」を一緒に歌いました。みなさん、呼吸法と声出しをやったあとだからか、大変元気な声で歌っていました。



### 皆さんとお別れ

一時間ちよつとくらのイベントで、高齢の方が多かったにもかかわらず、みなさん最後まで熱心に付き合ってくれました。そして、最後は皆さんの笑顔を見せていただきました。

終わったあと、何人もの方から握手を求められたり、抱きかかえんばかにされたりしながら、別れを惜しみました。

最初は騒いでいた男の子はひなたくんという名前です。途中ですっかりなじんでしまし、とくに照井数男とは友だちになつたらしくてふたりでじゃれあっていました。これでお別れだよという際にはなんだかものすごく悲しそうで、ちよつと怒っているような顔になったり、見た目もかわいそうなくらいがっくりと肩を落として去っていくのでした。

機材と荷物を撤収。

全員車に乗りこんで、仮設住宅地をあとにしました。



と、車に向かつてひなたくんが走ってきて、道ばたで手を振ってくれ  
 ではありませんか。よほど名残惜しかったんでしょう。私たちもいろ  
 な思いを抱えながら、被災地をあとにしたのでした。

帰りの道中のことは割愛します。

帰路ではいろいろなことをかんがえました。

すでに書きましたが、被災地ではまだまだ支援を必要としていること。  
 その支援の形も、時間と状況に応じて変わりつつあること。

物質的支援だけでなく、これからは被災地との「つながりの質」が必要になっ  
 てくるのではないかと思っています。私  
 たちはささやかなイベントをおこなった  
 だけですが、そのなかでもとくにコミュ  
 ニケーションの大切さを感じました。良  
 質のコミュニケーションを取りながら、  
 物資にしても精神的支援にしてもおこ  
 なっていく必要があるのではないかと思  
 います。できればその両方があるとい  
 い  
 ですね。

たとえば、物資を運んでいくにしても、  
 皆さんに集まってもらい、そこでなにか  
 コミュニケーションを取りながらいっ  
 しょになにかを楽しんだり、ケアワーク



をおこなったりしつつ、必要な物資を持って帰っていただく、というよう  
 な方法です。

現代朗読協会では、今後できればこのような活動をつづけていきたい  
 と思っています。そのためには皆さんの支援も必要です。そのことを願  
 いしておきたいと思います。

そして、今回のツアーを全面的に援助してくれ、また道中と現場でもサ  
 ポートしてくれた三谷産業株式会社とその松嶋さん、都平さんに、深く感  
 謝したいと思います。

最後に、今回の被災地支援ツアーに、カンパやその他さまざまな形でご  
 協力いただいた方々の名前をあげさせていただきます（敬称略）。

三谷産業株式会社  
 松嶋忠之  
 都平祐浩  
 伊藤香代子  
 嶋田尚子  
 唐ひづる  
 船渡川広匡  
 佐藤麻奈  
 田中智

矢澤亜希子  
現代朗読協会ゼミ生のみなさん

◎被災地支援ツアーメンバー

野々宮卯妙

唐ひづる

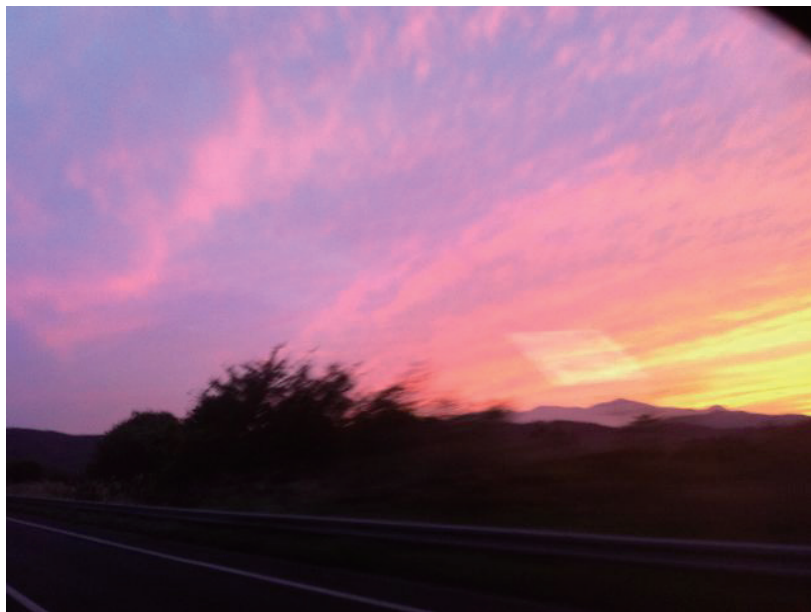
伊藤さやか

山田みぞれ

照井数男

水城ゆう

(おわり)



みずき  
水城 ゆう

1957年、福井県生まれ。

東京・世田谷在住。

作家、ピアニスト、演出家、コンテンツプロデューサー。

NPO法人現代朗読協会 代表。

著書 『BODY』電子ブック

『原発破壊』

『オーディオブックの真実』電子ブック

『音読・群読エチュード』ラピュータ

『祈る人』アイ文庫／電子ブック

『浸透記憶』アイ文庫／電子ブック

『白恋（ホワイト・ラブ）』ブックキング（小説音楽&朗読CD付き）

『シングル・クッキング』碧天舎

『週末バーテンダーのすすめ』碧天舎

『麵喰紀行』碧天舎

『情報活用術』ブックマン社

『ジャズの聴き方』ブックマン社

『水城式ピアノの弾き方』山海堂

『携帯パソコンの仕事術・遊び術』メディア・テック出版

『紺碧の少女——南洋の奪取作戦 1943』ログアウト冒険文庫（アスキー）

『赤日の曠野』青峰社

『小説工房 Vol.2』青峰社

『小説工房』青峰社

『夢巫女・美緒』ログアウト冒険文庫（アスキー）

みなみさんりく  
2011年9月 南三陸・石巻紀行

---

2011年10月6日 第1刷発行

著者 水城 ゆう

発行者 有限会社 アイ文庫

〒156-0042 東京都世田谷区羽根木 1-20-17

<http://ibunko.com>

---

表紙デザイン おおぼ かのん  
大庭 花音

©2011, MIZUKI Yuu